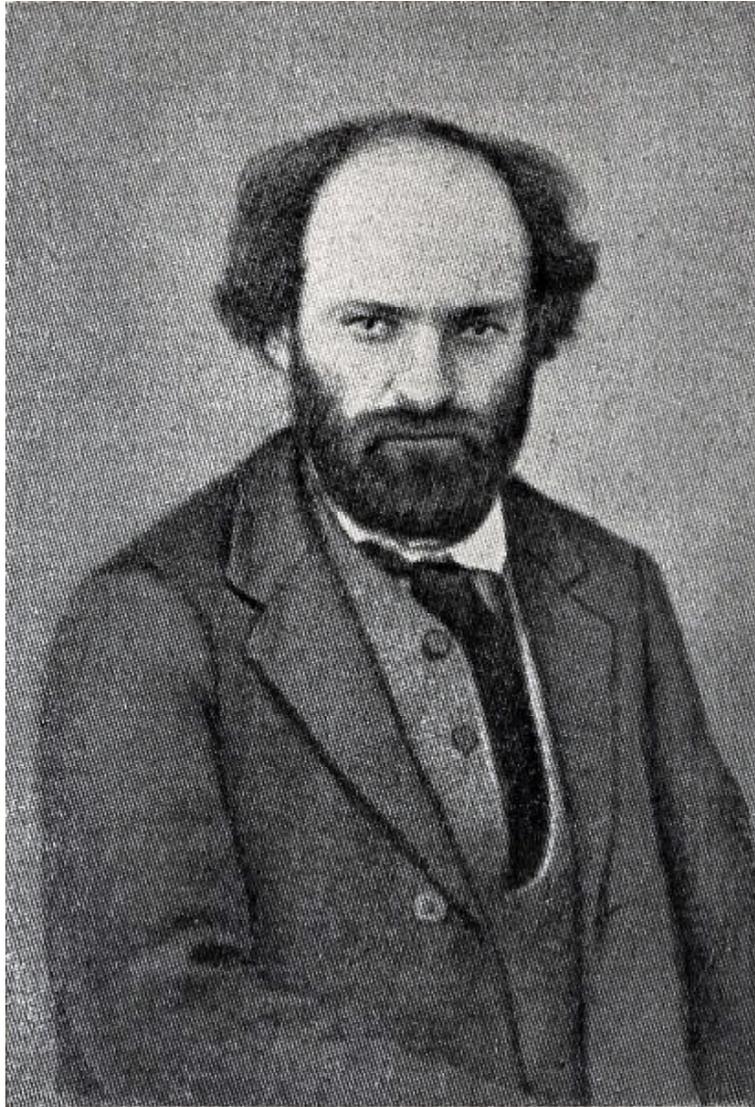


「ポール・セザンヌ、その絵画と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paul_C%C3%A9zanne.jpg

「どう考えるか」ではなく「どう感じるか」との信念から大胆自由な描法、鋭い感覚と知性で美術の可能性を示し続けたポール・セザンヌ（1839-1906）。

「季語に遊ぶ」では前6回、西洋美術と俳句の組み合わせを試みてきました。

第7回の今回は《モデルヌ・オランピア》《赤いチョッキの少年》《カード遊びをする人々》《大水浴図》など伝統的な常識や規範にとらわれず、創造や発明の原点である「感じる力」を示し続けたセザンヌ。

彼の作品が評価されるのは晩年になってですが、死後、その名声と影響力は高まり、マティスをして「セザンヌは私たちみんなの先生です。」と言わしめ「近代絵画の父」と称されています。

セザンヌが生涯追い求めた目標は「感覚の実現」。

そんな彼の作品を制作時期順に掲載し、その作品に合う俳句を選んでみました。

お楽しみ下さい。

作品の下に制作時期 | 作品詳細 | 所在を記載しています。

俳句の下に作者、生年・没年を記載しています。

1. 《「レヴェヌマン」紙を読む画家の父》



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Le_P%C3%A8re_du_peintre_lisant_L%27%C3%89v%C3%A9nement,
par Paul C%C3%A9zanne.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Le_P%C3%A8re_du_peintre_lisant_L%27%C3%89v%C3%A9nement_par_Paul_C%C3%A9zanne.jpg)

1866年 | 油彩、カンヴァス 200 × 120 cm | ワシントンDC、ナショナル・ギャラリー

セザンヌの父は帽子職人から身を起こし、会社を設立し、その財を元に銀行家に転じ、資産を増やし続け、一代で巨万の富を築きました。

実業家の父が息子に望んだのは、息子が金融業を継ぐことで、画家になるなどもってのほかでした。そこで、セザンヌは地元大学の法科に入学しますが、画家への夢は断ち切れず、一悶着の後大学を中退してパリに向かいます。

パリで生活し始めたものの、自信を無くし数か月で帰郷し、父の命令で銀行勤めを始めます。

しかし、自分の望んでいることはしていないと苦悩の末、再びパリに出ます。

「レヴェヌマン」紙はスキャンダル記事を売り物にしていた夕刊紙です。

保守的な父は同紙を嫌っていたことから、この絵は、セザンヌが画家になることに理解を示さない父に対する皮肉が込められているとする説と、父が座わる椅子の後ろにセザンヌの静物画が掛けられていることから、父が自分の理解者になったことを示しているとする説があります。

父の像と椅子の背もたれの位置は極端にずれていて、緊張感が生まれています。

ここでは父を詠んだ句を選んでみました。

父と子よよき櫓くべし嬉し顔（櫓＝ほた、木の切れはし）

炭太祇(たん たいぎ) (1709-1771)

季語<櫓>で三冬

新聞を父が叱れり龍の玉

太田土男(おおた つちお) (1937-)

季語<龍の玉>で三冬

ふるさとに父の独酌虎落笛(虎落笛＝もがりぶえ、厳冬に風がひゅーひゅーと音を立てて渡ること)

大串章(おおぐし あきら) (1937-)

季語<虎落笛>で三冬

父は冬のイメージが強いのか、三句とも冬の季語です。

2. 《スキピオという名の黒人》



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paul_C%C3%A9zanne_-_O_Negro_Cipi%3%A3o.jpg

1867年頃 | 油彩、カンヴァス 107 × 83 cm | ブラジル、サンパウロ美術館

スキピオはアカデミー・スイスの人気黒人モデル。
青いズボンをはいて上半身は裸で粗末な椅子に腰かけ、白いクロスをかけられたソファーにもたれて仮眠しています。
背景は暗くてムラのないかっ色で、明るいズボンの色と対照的です。
体は力強く肉づけされ、右手首によって椅子の明るいかっ色につながられています。
3種類の色彩が巧みに用いられ、構図も椅子の形を作る垂直、水平の線が安定感を与えています。
当時、サロン（官展）では認められず、落選を繰り返していたセザンヌの作品ですが、同業の画家たちはその先進性を見抜いて、競ってセザンヌの作品を買い求めていました。
この作品はモネが購入しています。

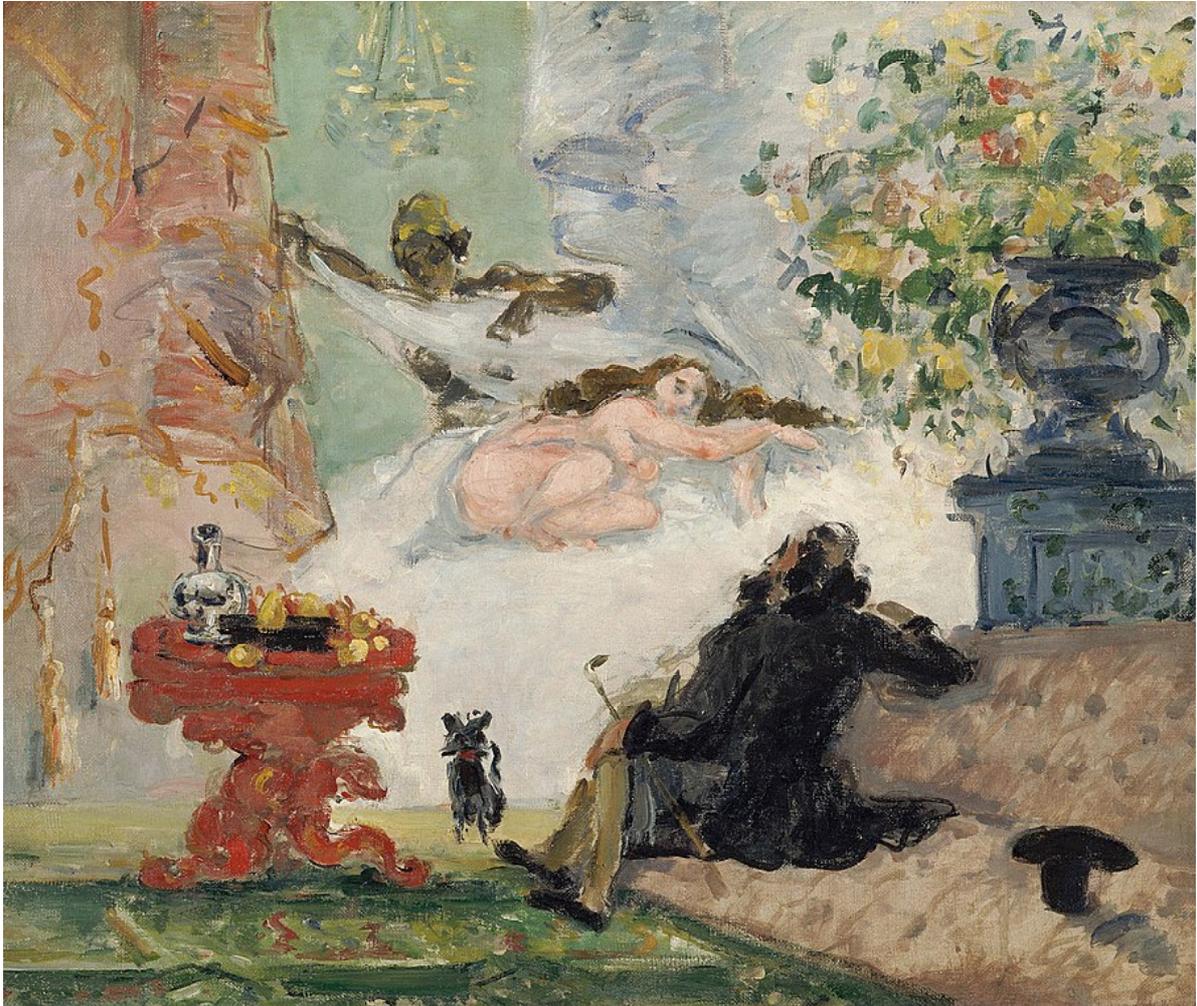
ここでは黒人を詠んでいる句を選びました。

馬酔木咲き黒人 K のさらなる嘆き（馬酔木=あせび、花言葉は「犠牲」「献身」、Kはキング牧師という連想も）
金子兜太（かねこ とうた）（1919-2018）
季語＜馬酔木の花＞で晩春

椎の花黒人霊歌地を這ひ来（這ひ来=はいく）
鍵和田ゆう子（かぎわだ ゆうこ）（1932-）
季語＜椎の花、強烈な匂いを発散します＞で仲夏

銀漢や喝采黒人ピアニスト（銀漢=ぎんかん、天の川のこと。英語では Milky Way）
仙田洋子（せんだ ようこ）（1962-）
季語＜銀漢＞で初秋

3. 《モデルヌ・オランピア》



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paul_Cezanne,_A_Modern_Olympia,_c._1873-1874.jpg

1873～74年 | 油彩、カンヴァス、46 × 55 cm | パリ、オルセー美術館

1865年にパリのサロンに出品され、大いに物議をかもしたマネの《オランピア》を意識して制作した作品。

「モデルヌ」は現代の、最新のという意味です。

ゴッホの精神科医で絵画愛好家のポール・ガッシュがマネの《オランピア》を賞賛したところ、セザンヌは、なに、あんなものは簡単にできるといって、一気にこの作品を描いたとされています。

召使いがオランピア（娼婦）を覆っていた白い布をいきおいよく引きはがし、裸体を客であるセザンヌにさらけ出しています。

左にピンクのカーテン、右に花をたくさん盛った花びん、赤い円卓、そしてセザンヌ自身と脱ぎ落した帽子、小犬にマネやルノワール好みの黒がアクセントとしてよく効いています。

西洋美術の伝統では、白いベッドとシーツは聖母マリアなど聖人の乗る雲を連想させるものです。

それまでの西洋美術における裸婦表現のしきたりを破り、当時の社会の現実を描き出した点できわめて挑発的な作品といえます。

また、マネの《オランピア》に描かれていた猫は小犬に置き換えられています。

ここではオランピアが横たわっていた白いベッドとシーツに着目して敷布、シーツを詠みこんでいる句を選びました。

花桐や敷布くはへて閨の狝（閨＝ねや、狝＝ちん）

飯田蛇笏（いいた だこつ）（1885-1962）

季語＜花桐＞で初夏

雁をきく敷布の皺をのぼしつつ（皺＝しわ）

桂信子（かつら のぶこ）（1914-2004）

季語＜雁（かり）＞で晩秋

白シーツ明日白鳥になるつもり

辻美奈子（つじ みなこ）（1965-）

季語＜白鳥＞で晩冬

4. 《赤いチョッキの少年》



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Boy in the Red Vest.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Boy_in_the_Red_Vest.jpg)

1888～90年 | 油彩、カンヴァス、79.5 × 64 cm | チューリヒ、ピュルレ・コレクション

セザンヌの最も有名な作品の一つでよく目にする絵画です。
ほお杖をついた赤いチョッキの少年（少女にも見えますが）の両腕は主観的遠近法によって変形されています。
画面手前の右腕は極端に拡大し、逆に奥の左手は縮小し描かれています。
拡大された右腕が構図の中心に置かれていることで、存在感を与えています。
ほお杖をつくポーズはセザンヌが好んだポーズの一つでもあります。
構図、配色、デッサンなどあらゆる点で彼の作品の頂点をなすもの。
画家として、一時落伍者扱いされていたセザンヌの健在ぶりを示し、この作品を見た長年の同僚である、モネやルノワール、ドガたちを大いに喜ばせました。

ここでは、主観的遠近法によって拡大されている右腕と縮小されている左腕に注目し、腕を詠んだ句を選んでみました。

片陰の窓に出ている腕かな（腕＝かいな）

下村槐太（しもむら かいな）（1910-1966）

季語＜片陰＞で晩夏

さみしさの昼寝の腕の置きどころ

上村占魚（うえむら せんぎょ）（1920-1996）

季語＜昼寝＞で三夏

二の腕は柘榴と同じ味がする（柘榴＝ざくろ）

權未知子（かい みちこ）（1960-）

季語＜柘榴＞で仲秋

5. 《カード遊びをする人々》



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les Joueurs de cartes, par Paul Gauguin, collection Al-Thani, Yorck.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Joueurs_de_cartes,_par_Paul_Gauguin,_collection_Al-Thani,_Yorck.jpg)

1892～93年 | 油彩、カンヴァス 97 × 130 cm | カタール王室

《カード遊びをする人々》は5点の連作が知られていて、人物の数は5人のものと4人のものが各1点、2人だけのものが3点あります。

取りあげたものは連作の5点のものの中の一枚で、カタールの王族が2011年にギリシャの海運王から購入したと報じられた作品で、購入価格は推定で2億5千万ドルから3億2千万ドルという記録的な金額でした。

均整のとれた構図、渋く深い色彩、ブドウ酒のびんの白い反射が構図上の中核をなし、これを中心として向かい合う2人の背から首にかけての線が雄大なアーチ形を作っています。遊びに潜む沈黙、静寂を取り出したセザンヌの代表作の一つです。

ここでは日本のカード遊びである新年の季語、歌留多（かるた）を詠んだ句を選びました。ちなみに歌留多の語源はポルトガル語です。

胼の手も交りて歌留多賑はへり（胼＝ひび）

杉田久女（すぎた ひさじょ）（1890-1946）

かるた切る心はずみてとびし札

高橋淡路女（たかはし あわじょ）（1890-1955）

歌かるた掠め取られし恋の札（掠め＝かすめ）

辻田克己（つじた かつみ）（1931-）

6. 《りんごとオレンジのある静物》



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nature_morte_aux_pommes_et_aux_oranges,_par_Paul_C%C3%A9zanne.jpg

1899年 | 油彩、カンヴァス 74 × 93 cm | パリ、オルセー美術館

6年の歳月をかけて完成した、セザンヌの晩年の静物画の代表作。
クッション付きの長椅子に垂れ幕をかけ、数枚のナプキンを敷いて、その上にりんご、オレンジ、果物皿、ミルク入れが置かれています。
それらが今にもころがり落ちそうで一見不安定な感じですが、水平・垂直軸に従って配置されて安定を保っていて、不安定と安定が画面上でせめぎ合っています。
絵の具はうすく塗られていて、左端のナプキンはカンヴァスの地をほとんどそのまま残しています。
りんごとオレンジには赤から黄色にかけて明暗と量感の転調がみとめられます。
セザンヌの円熟のきわみといえる作品です。

ここでは晩秋の季語である「林檎」を詠んだ句を選びました。

星空へ店より林檎あふれおり

橋本多佳子(はしもと たかこ) (1899-1963)

空は太初の青さ妻より林檎うく (太初=たいしょ、天地の開けはじめのこと)

中村草田男(なかむら くさたお) (1901-1983)

セザンヌの林檎小さき巴里に来て

森尻禮子(もりじり ひろこ) (1941-)

7. 《サント＝ヴィクトワール山》



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Montagne Sainte-Victoire, par Paul C% C3%A9zanne 109.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Montagne_Sainte-Victoire,_par_Paul_C%C3%A9zanne_109.jpg)

1904～06年 | 油彩、カンヴァス 65 × 81 cm | 個人コレクション

サント＝ヴィクトワール山はセザンヌの故郷フランス、エクス＝アン＝ブロヴァンスの郊外そびえる白い石灰岩質の標高 1,000m ほどの山。

左側のなだらかな斜面と右側の急な斜面からなります。

古代ローマ時代の争いでの勝利を記念して「勝利の聖なる山」と名づけられました。

セザンヌはこの山を油絵、水彩、素描などで多く描いていますが、この作品が最も完成されたものです。

空と大地の間で山がそそり立ち、空よりも強い青と大地より弱いかっ色、樹木より淡い緑をとり入れた姿で左から右に向かって動きだそうとするかのように感じられます。

その雄大さは海原を進む軍艦のようにも見えます。

水平的要素の強い画面上方に対して下方の地面や家、樹木の緑などが縦の短かい筆触を並列させて与えられています。

緑は中景から右側にかけて濃く、山に近い部分は明るいかっ色で最前線ではより弱い緑やかっ色とともに空の色も呼びこまれています。

ここでは山の四季を詠んだ句を選びました。

故郷やどちらを見ても山笑ふ

正岡子規(まさおか しき) (1867-1902)

季語<山笑ふ>で春

笠一つしたゝる山の中を行く

正岡子規(まさおか しき)

季語<したゝる山＝山滴る>で夏

最澄の山も粧ふことをせり (最澄の山＝比叡山)

鷲谷七菜子(わたに ななこ) (1923-2018)

季語<山粧ふ>で秋

山眠る夕日の溜り場をふやし

村越化石(むらこし かせき) (1922-2014)

季語<山眠る>で冬

8. 《大水浴図》



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les Grandes Baigneuses, par Paul Gauguin, Yorck.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Grandes_Baigneuses,_par_Paul_Gauguin,_Yorck.jpg)

1906年 | 油彩、カンヴァス 204 × 249 cm | フィラデルフィア美術館

晩年の7年間で費やして描かれたこの作品は、これまでに制作された数々の水浴図の到達点と言え、当時の若い画家たちに多大の影響を与えました。

前景の地面と左右の太い樹木とがピラミッド形を作り、両側に多くの女性像が配されています。

彼女たちはおおまかに右と左に分かれ、それぞれに小さいピラミッド形を構成しています。

中景には川があり、対岸は次第に遠い家や林にまでも達しています。

建物の塔や立ち木とともに、対岸の人物も遠景で垂直の要素をなし、これが右側に入ってゆこうとする女性の右側にも反復されています。

論理的な画面構成は、セザンヌが次第に心に抱いてきた古典主義の結実であると言えます。

この巨大な 204 × 249cm の水浴図を運び出すことを想定して、アトリエの窓の横には天井まで伸びる戸口が作られていました。

1906年10月15日、激しい夕立の中、野外で長時間制作を続けたセザンヌは帰宅途中、意識を失い、昏睡状態に陥り、23日永遠の眠りにつきました。

「絵を描きながら死にたい」と語っていた画家の望み通りの最期でした。

ここでは《大水浴図》のイメージから女性と湯を詠んだ句を選んでみました。

窓の雪女体にて湯をあふれしむ

桂信子(かつら のぶこ) (1914-2004)

季語<雪>で晩冬

陰しめる浴みのあとの微光かな (陰=ほど、浴み=ゆあみ)

金子兜太(かねこ とうた) (1919-2018)

無季句

露天湯は乙女らが占め朧なり (朧=おぼろ)

堀口星眠(ほりぐち せいみん) (1923-2015)

季語<朧>で三春

私も詠んでみました。

洋梨の香や浴室の影動く（香＝か）

白井芳雄

季語＜洋梨＞で三秋

今回は「ポール・セザンヌ、その絵画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：『現代世界美術全集 3 セザンヌ』（集英社）（1969年）
1371-536003-3041

はしもとゆうこ・久保恵子編集・永井隆則著
『もっと知りたい セザンヌ 生涯と作品』（東京美術）
ISBN978-4-8087-0945-7 C0071

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子
『日本の365日を愛おしむ』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com